

## 大塚君とむらひの日に

著者	高木, 市之助
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 8
ページ	1 3 9 - 1 3 9
発行年	1918-12-25
その他の言語のタイトル	大塚君とむらいの日に
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6859">http://hdl.handle.net/2298/6859</a>

## 大塚君とむらひの日に

教授 高木市之助

いく百のこゝろあつまりひしくといだきしめたりいたましき君を。

『もういゝ』をとつひは云ひきおごそかに今は黙しぬまたおごそかに。

靈前の友のことばはときれつゝたふとくありけりありのまゝにて。

そのいのち『死ぬる死ぬる』とさけびたるたゝかひのあとのけふのしづけさ。

たゝかひは清くさみしき君ゆねにいとごはげしくたゝかはれけむ。

癒ね果てばざりしや語やらうとつぶやきていく日もあらぬに。なにのぎりしや語。

なにうらむとは無けれども人の死のいきどほろしくたへられぬかも。

君を思ひわれを思ひつぬかるみを歩いて來れば日は暮れにけり。

—(七、十二、六)—

月 似 古

春 野 晚 翠

世々を経て人はふりにし宿たによ昔ながらの月はすみける。

遠 島 月

和だの原はるけき島の山の端にかゝるかがみの秋の夜の月。